

# 1 散村と私たちの暮らし



上空から見た砺波平野 (平成 14年9月1日撮影)

## 砺波平野の散村

砺波平野の家は、写真のように一軒一軒が約 100 m～150 m 間隔で、バラバラに点在しています。これを散村<sup>①</sup> (または散居村) といい、全国的にも珍しい集落形態です。

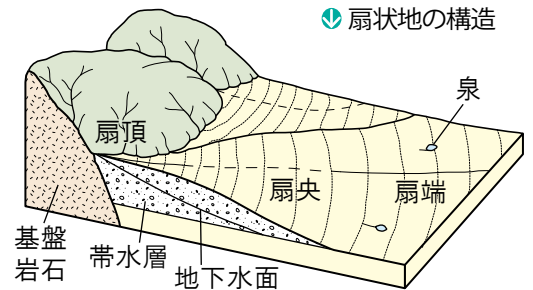
## 散村ができるまで

砺波平野は、主に庄川がつくった扇状地<sup>せんじょうち</sup>です。用水をつくる技術が発達すると、それまで森林が広がっていた扇中央部の開拓が本格的に始まりました。奈良時代には東大寺の荘園が作られ、日本有数の米どころとして知られるようになりました。

庄川は流れが速く、ダムや堤防ができるまで洪水が非常に多い川でした。そこで、人々は平野の中で少し高くなっているところ (微高地) を選んで住むようになりました。扇状地は扇頂<sup>せんとう</sup>から扇端<sup>せんたん</sup>に向けて傾いています。その傾きを利用して、どこにでも水を引き、田んぼをつくることができました。耕作や手入れがしやすいように家の周りを自分の田んぼにしていた結果、家と家が離れ、散村ができたと考えられています。他にも、砺波平野に吹く強風で火災が広がるのを防ぐために家と家との間が広がったともいわれています。

①ヨーロッパでは散村は、北ヨーロッパ、イギリス、アルプスとその周辺地域、ディナールアルプス山麓のほか、ロアール川下流域などで見られます。日本では、富山県の砺波平野、黒部川扇状地、静岡県の大井川下流域、香川県の讃岐平野、島根県の出雲平野、岩手県の胆沢扇状地などが知られています。

扇状地の構造





アズマダチの家屋 (砺波市太田)



マエナガレの家屋 (砺波市五郎丸)

## アズマダチとマエナガレ

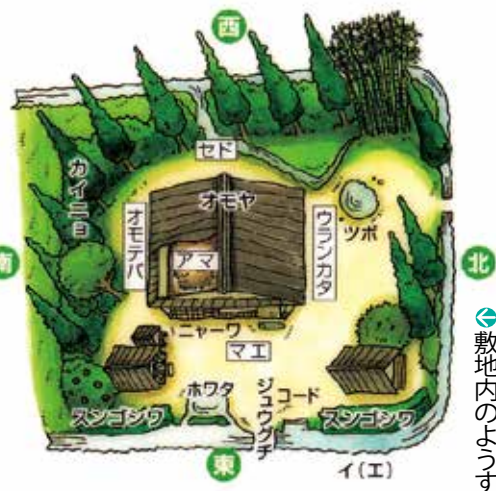
江戸時代まで、砺波地方の家の多くが、かやぶき屋根の「クズ屋」でした。屋根は右の写真のようにすべての面が傾斜していて冬に雪おろしがしやすい



↑ かいによ苑 (砺波市豊町)

よう工夫されていました。明治時代になってアズマダチ (東建ち) ①やマエナガレ (前流れ) と呼ばれる形式の家が広まりました。

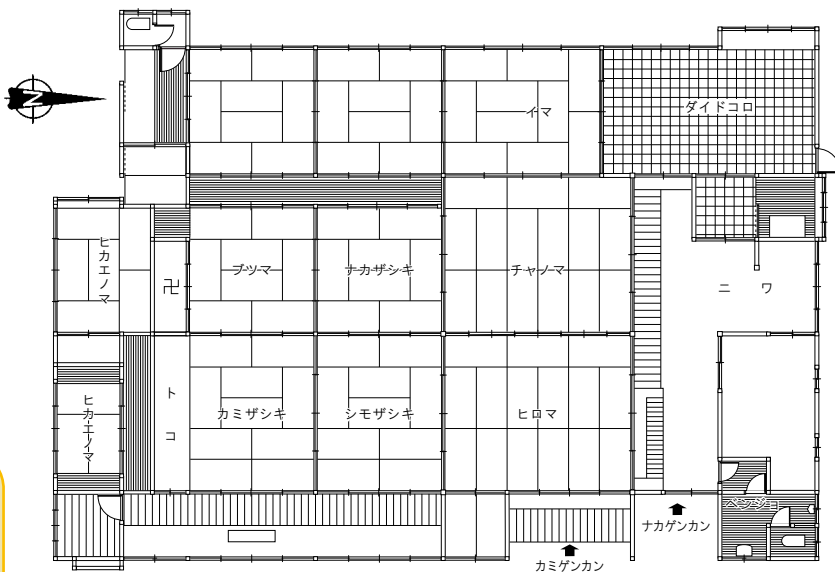
下の部屋割りの図のように、アズマダチはしきりの壁が少なく、高い屋根を太い柱で支えています。板戸を取り外すと「ブツマ」から「チャノマ」までつながり、大きな畳の部屋 (座敷) ができます。そこで、「ホンコサマ」②などの法会を行い、近所の方や親戚を集め、ご馳走をふるまいました。



← 敷地内によす

① アズマダチのデザインは、江戸時代の金沢の武家屋敷に発し、それが江戸末期に十村役の役宅などに取り入れられたもので、農民があこがれたデザインでした。

② ホンコサマ (報恩講) は、浄土真宗を開いた親鸞上人の亡くなられた日 (11月28日) に毎年行われる法会です。親鸞の好物だと言われる豆と様々な野菜や油揚げなどを柔らかく煮込んだ「いとこ煮」が仏壇にそなえられました。経が終わると、そのいとこ煮を中心に、何日もかけて用意された精進料理を食べながら語り合い、親戚や近所同士の絆を深める楽しい時間を過ごしたといえます。



← アズマダチの部屋割り

砺波平野の民家は、家の向きが北東から南東を向いている家が95%を占めています。これは、砺波は東からの風が極端に少ないことが原因だと思われます。

西風が強いので、玄関は東に、仏間は南側につくられました。

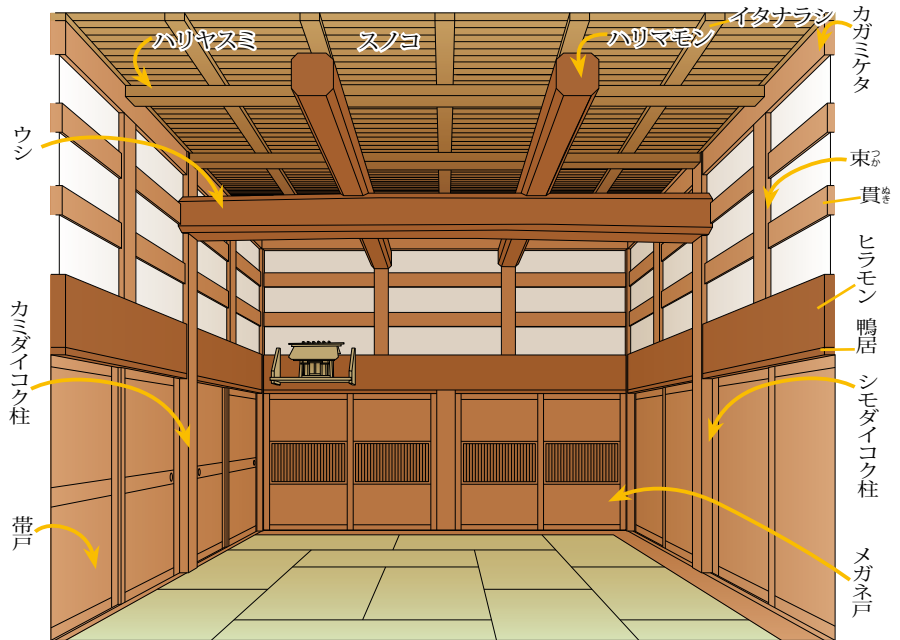


## 広間のワクノウチ

砺波の伝統的な家は、広間が間取りの中心になります。広間は、**ワクノウチ造り**(枠の内造り)といって太い梁や差鴨居(ヒラモン)を組んだ構造になっています。

## 家の周りに田んぼを作る

稲作で重要なことは水の管理です。朝夕に田んぼを見回り、天候や稲の成長を考えて田んぼの水を調節すると質の良い米がたくさん収穫できます。肥料をまいたり、刈り取った稲を雨が降る前に素早く取り込んだりするのも、家の周りに田んぼがあるのは効率的です。👉ワクノウチ造り  
散村は、常に田んぼを観察し、きめ細かく世話ができるように工夫した、先人の知恵なのです。



## 「高(土地)を売ってもカイニヨは売るな」

立派な屋敷林に住むことを誇りにして、先祖代々からの屋敷林(カイニヨ)を大切に守り育てようということ。昔はカイニヨの大きさが家柄を示したそうです。しかし、砺波地方では、大切にされてきた屋敷林が現在失われつつあります。未来に美しい散村の景観を残すために私たちにできることを考えてみましょう。



## カイニヨの役割



### 1 強い風や冬の風雪から家を守ります

- ・山に当たって吹きおろす冬の風は、平野部の2~3倍の強さになります。暴風による屋敷の破損を屋敷林は防いでいました。
- ・しばしば起きた洪水のとき、木の根が家の基礎を守り、被害を最小限に抑えました。

### 2 夏の暑さや冬の寒さをやわらげます

- ・フェーン現象の発生によって砺波平野の夏の最高気温は沖縄より高くなることがあります。屋敷林は、木陰をつくり、湿度を調整することで体感温度を10度近く下げます。

### 3 スンバ(杉葉)や小枝はイロリや風呂炊きの貴重な燃料として使われていました

- ・屋敷林から出た落ち葉や小枝は燃料となりました。囲炉裏を囲んで家族は、暖をとり冬の寒さを防いでいました。

### 4 家を建てる木材や生活道具の材料に使われます

- ・砺波平野の屋敷林には杉が多く、建物が古くなったり、壊れたりしたとき、屋敷林は建材として活用されました。竹なども生活に必要な道具に加工されました。

### 5 実のなる木を植えて食料とします

- ・柿やいちじく、びわなどの果実は、食生活を豊かにしました。



## 散村と散居村、どっちが正しいの？

ふだん生活していると道路の看板や新聞・テレビで「散居村」という言葉を目にします。古くから地理学や学校教育では「散村」が使われており、砺波平野のように民家が点在する集落形態を全国的には「散村」といいます。しかし、富山県内では「散居村」を使うことが多く、その背景には、散村が「山村」と同音でまぎらわしいという理由があると思われる。

## 失われていく散村と屋敷林

農業が近代化すると、散村の利点は少なくなりました。また、1960年ごろから住宅団地が多く造成されたこともあり、散村景観が失われつつあります。

また、屋敷林についても、電気やガスの普及で落ち葉や小枝が燃料として利用されることがなくなりました。建材として利用された杉の木も、安い輸入材や化学合成された建材に押されて利用価値を失っています。このほか下のよう理由により、屋敷林は伐採され、失われつつあります。



散村に造成された住宅団地

## 屋敷林が減ってきている理由

<p><b>理由①</b> スノバの掃除が大変なので、切られました。</p>	<p><b>理由②</b> 家の建て替えや、車庫をつくる時に切られました。</p>	<p><b>理由③</b> 地下水位が下がり、水が不足した時に枯れました。</p>	<p><b>理由④</b> 台風で倒れた後や枯れた後に木を植えなくなりました。</p>
--	---	---	---

## 散村の景観を守るために

美観を保ち砺波らしさを守ること、自然とのかかわりや環境問題への対応などから屋敷林（カインヨ）の新たな役割を見直す活動が始まっています。

### 新たに見直されている役割

- 1 美しい景観や文化的景観をつくります。
- 2 空気をきれいにします。
- 3 夏の暑さや暴風を和らげます。
- 4 安らぎと潤いのある生活をあたえます。
- 5 身近な生き物の生息場所となって土や水が浄化されます。

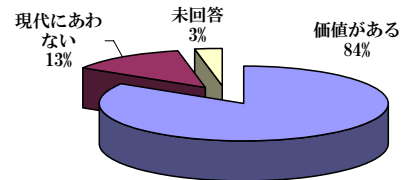
かけがえのない散村の景観を守るために、国・県・市ではさまざまな取り組みを行っています。

### 国・県・市の取り組み

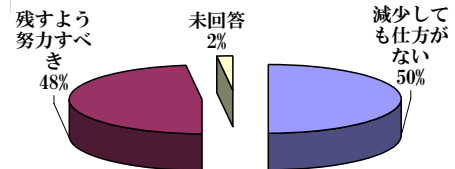
- 屋敷林を守る協定を結んだ集落に対し、屋敷林の枝打ちなどにかかる費用を支援しています。
- 散村の文化的な景観を守るために調査を行っています。
- 「屋敷林の維持管理の手引き」を作成し、住民に配布し、屋敷林の保全に役立ててもらっています。
- となみ散居村ミュージアムを開館し、市民が散村を学ぶことのできる場を作っています。

## 住民アンケートの結果（平成17年実施、対象：砺波市・南砺市）

### 砺波平野の散村について



### 散村の未来について



となみ散居村ミュージアム（砺波市太郎丸）

